

新春対談

目代清氏を偲んで



対談

西川 扇藏 勲日本舞踊振興財団・理事長

一ノ瀬邦夫 日本大学 芸術学部長

原 一平 日本大学教授（芸術学部）

平成15年11月18日(火)日本大学 芸術学部 学部長室にて
【敬称略】

日本舞踊専門の研究者、学者として多彩なご活躍をされた目代清氏は約2年間の闘病生活の末、昨年6月、66歳で逝去された。今回は、目代氏が最後まで教鞭をとられていた日本大学芸術学部にて氏を偲んだ。

西川 早いもので目代先生が亡くなられてからすでに5カ月。余りにも惜しまれながら逝かれてしまったので、その後あっという間に時間が過ぎてしまったような気がいたします。

一ノ瀬 私は平成12年に本芸術学部の学部長を拝命されましたが、学部次長には是非目代先生になっていただきたいをお願いをしたのです。しかしほどなく発病されまして、無理して大任を頼まなければ病に取り付かれることもなかったのかなと悔やまれます。何と言っても責任感の強い方でしたから。

西川 仰る通りですね。目代先生が最初に入院されたとき、丁度私どもの流派の門弟の舞踊会がございまして、その中で先生に講演をお願いしていたのですが叶わなくなり、そのことを大変気にされていました。私どもはその講演を中止にして先生には心置きなく療養

されるようにお話しいたしたのですが、何と先生は当日に間に合うように原稿を書いて下さったのです。

一ノ瀬 なるほどね、目代先生の性格といいましようか生真面目なところが表れていますね。先生は大変饒舌でいらっしやいましたし、非常にユーモアもおありの方でしたので、生真面目な部分というのは表に出にくかったような印象ですが、先生ほど生真面目な方はいらっしやらないのではないかとと思っています。

西川 私どもは当然のことながら目代先生に日本舞踊の研究者として接しておりまして、それも随分と長いこと懇意にさせていただいておりましたが、私どもが余り良く知らない部分、本来の大学の教授、或いは学部次長という学校法人の組織のなかで、目代先生がどのような来し方をされてきたかもお伺いしたいと思っております。

- 一ノ瀬 先生の思い出を巡らしますと様々なことが浮かんで参りますが、例えば学校の会議等で流れが違った方向に進みそうになったり、だらだらとしてきたりすると決まって目代先生が発言なさいまして、あの弁舌爽やかな話術でもってきちんと正論を仰ってくれるんです。
- 西川 先生の話術というのは全く澁みなく、音吐朗々とまるで舞台上でセリフを言っているような感じでした。
- 一ノ瀬 その話術を支えているのが、ものの見方と言ったらよろしいでしょうか、緻密に分析されたものがおありでしたから、話術も余計生きてくるのでしょうか。
- 西川 それからあらゆることに関して好奇心が旺盛な方でした。
- 一ノ瀬 それは相当なものでございました。ご自身の病気についても丹念に調べていました。投与される薬にしても専門的な知識を持っていらっしゃいました。
- 西川 そこまでなさらないと気が済まないのでしょうか。
- 一ノ瀬 それからいろいろな資格をお取りになっていたようです。私も詳しくは知りませんが、不動産とかあきらかに先生の専門外の免許を持っていらっしゃいました。
- 西川 それは存じ上げないです。それから初物がお好きでしたね。
- 一ノ瀬 新製品がでるといち早く購入されていました。
- 西川 携帯電話もまだ走りのときに使っていたし、ノートパソコンもまだ珍しいときから持ち歩いていました。それで複雑な機能を説明して頂くのですが、こちらは機械音痴だからさっぱりわからない(笑)
- 一ノ瀬 いつぞやはミニバイクを得意気に乗り回していたのですが、転んで軽い怪我をなさってからはその姿を2度と見ておりません(笑)
- 西川 初物といえば、新築をされたお宅に伺ったとき、部屋の畳がセリ上がるのにはびっくりしました。
- 一ノ瀬 あれは床下に物が収納できるように設計していただいたそうですね。
- 西川 外からリモコンで雨戸を閉めたり、お風呂も沸かせたりできるそうですね。
- 一ノ瀬 留守を守ってくださるお母様になるべく負担をかけないようにとの配慮だそうですね。
- 西川 親孝行でいらっしゃいましたね。
- 一ノ瀬 私は学部全体として先生とお付き合いさせていただきましたが、演劇学科の中でのことはさらに詳しい原教授にお話しいただきましょう。
- 原 目代先生は発病されてから約2年間、でき得る限り登校されるように努力されておりました。いろいろな要職にお就きになっていらしたのをひとつずつ辞職され、学校だけに専念できるよう計らっていらっしゃいました。
- 西川 入退院を繰り返されて、心身両面でお辛かったのではないのでしょうか。
- 原 そうだったのでしょうか。けれどもそういった内面の辛さは余り表に出されませんでした。
- 西川 先生の気骨といいましょうか、冒頭で一ノ瀬学部長が話された責任感が強く生真面目であると仰られたのが良くわかるような気がします。
- 原 私どもが日大に入学した頃、目代先生は歌舞伎の舞台における娘方としては、すでに伝説の人でした。古い先生方からは散々聞かされたものです、先生の娘方は可愛くて品があって絶品でした、と。

- 西川 そうだったんですか。そういえば我々も三越劇場で「年増」やその他の女物を踊られたのを拝見していますね。
- 原 我々が入学したときはまだ講師の前の助手だったと思いますが、一方で日本舞踊七々扇流の重鎮として日本舞踊の舞台も踏んでいらっしゃっていました。
- 西川 舞台が本当にお好きでございましたね。
- 原 先ほど学部長や西川理事長が目代先生の話術を話題にされていらっしゃいましたが、昔は授業にしてもあそこまでアクションがオーバーではなかったような気がいたします。
- 西川 そうでしたか。
- 原 やはり永年の経験によって、如何にしたら学生達が興味を抱くだろうか、耳を貸してくれるだろうか、ということを考えられたのではないのでしょうか。今、奇しくも西川理事長は先生のことを舞台が好きだったと仰いましたが、聴講する学生を観客とダブらせていたような気もいたします。
- 西川 なるほど。
- 原 半分は冗談だとは思いますが、教壇のことを間違えて舞台と仰っていたときがありました（笑）
- 西川 先生らしいですね（笑）
- 原 ご存知のように西川流では昔から研究会を開いておりまして、ともに故人となられた田中良画伯と文学博士の松本亀松先生に長いことお世話になりました。その松本先生がお連れ下さったのがまだ助手の頃の目代先生でした。出会いはその時でした。
- 原 西川流でご流儀の家伝書を作られたのは目代先生のご功績でしょうか。
- 西川 はい、すでに40冊位になるでしょうか、目代先生なくしてはできるものではありません。
- 原 よく我々にも話されていましたが、先生としてはライフワークとして考えられていたようです。
- 西川 後世に残るものですから西川流としては貴重な財産です。
- 原 かつて日本舞踊を研究されたり評論家として活躍された方は、日本舞踊を専門に選ばれるのではなく、歌舞伎や能の研究者が日本舞踊もなさる、というパターンの方です。目代先生は最初の日本舞踊専門の研究者と言えるのではないのでしょうか。
- 原 そうだと思います。日本大学芸術学部の日舞コースは昭和44年に目代先生が創られ、今までに数多くの学生が教育を受けています。最近芸大が日本舞踊専門コースを設けましたが、それまでは本学の専売特許でした。
- 西川 近年、優秀な若手の日本舞踊家が出てくるたび出身を確認しますと、大多数が日本大学芸術学部出身ですね。
- 原 ありがとうございます。毎年大体12、3人位ずつ入学しておりますので、本学の日舞コース出身者も300人以上になるわけですね。
- 一ノ瀬 本学の演劇学科の中には日舞コースのほかにお隣には洋舞コースがあり、演技コースや演出コース、それからスタッフのための装置コースと照明コースもあります。劇作、理評コースを合わせ、8コースを総合的に編成する学科となっているのです。
- 西川 舞台芸術の全てが網羅されているわけですね。
- 一ノ瀬 はい。それから演劇学科以外に7つの学科があり、写真、映画、美術、音楽、文芸、放送、デザインと並んでいます。異なるジャンルの勉強をしている学生が、例えば学部祭等の行事では繋がりを持ったりするんです。

西川原 素晴らしい環境でございますね。日舞コースでいいますと、今卒業制作の準備がたけなわで先ほどキャンパスでチラシやポスターをご覧になられたかも知れませんが、チラシの画像は写真学科の学生が撮っているんです。作品の構成は文芸の学生が、そして当日の舞台は演劇学科の総勢で創り上げていき、映像は放送学科がビデオを廻すといった具合に、この江古田のキャンパスのなかだけで連帯感を持って活動しているんです。

西川 なるほど。日本舞踊のコースがあるというだけでなく、ジャンルを超えて芸術の勉強をしているお仲間が周りにたくさんいて、なお且つ互いに切磋琢磨している素晴らしい環境の大学でございますね。

一ノ瀬 恐れ入ります。

西川 これからも、芸術の香りが豊かなこの大学で大勢の若者たちが勉学に勤しみ、日本舞踊を志す人は目代先生が築き上げた日舞コースで大いに励んでいただきたいと思います。

一ノ瀬 目代先生のことを思い出しますと話が尽きませんが、残された者たちは先生のご意志をしっかりと噛みしめてこれからも堅実に歩んでいただきたいと願っています。

西川 仰る通りでございますね。先生は亡くなってしまいましたけれど、先生の業績を無駄にすることなく、これから一層日本舞踊界が発展していけるよう精進していきたいと思います。今日は本当にどうもありがとうございました。



↑左から、西川理事長、一ノ瀬芸術学部長、原教授

目代 清氏 プロフィール

昭和12年、神奈川県横浜市生まれ。日本大学芸術学部卒業。卒業後同校演劇学科研究室に勤務。助手、講師、助教授を経て昭和60年教授に昇格。平成12年、日本大学芸術学部次長に就任。文化庁芸術祭他多くの審査委員等を歴任。日本舞踊創作舞踊作品の作、演出等多数。

※代表作※

「吉原」(社団法人日本舞踊協会主催創作舞踊劇場)、「素踊り勸進帳」(文化庁芸術祭祝典)、「鳴神」(財団法人日本舞踊振興財団主催ロサンゼルス公演)等

没後、勲四等瑞宝章を追贈される。